

## 三陸の近景

⑪

### 街の変化と人の思い

津波の被害を受けた街の様子が大きく変わってきました。

更地に草花が目立っていた市街地には、ピラミッドの先端部が切り取られたような台形の土砂が雑草の緑をまどって点在しています。

この風景は津波被害を受けた場所に盛り土をし、土地をかさ上げる工事が進んでいる証拠です。

岩手県陸前高田市の旧市街地や宮城県気仙沼市鹿折地区など、広大な敷地に5㍍から8㍍もの土砂を盛るといわれています。大量の



土砂を必要としますので、近隣の山を崩し木を切り出し、大型トラックやベルトコンベヤーを使って土砂が運ばれているのです。

重機の音を背にして、「もはや故郷ではないよ」とため息まじりに話される男性がいらっしゃいました。「土木工事で潤うのは一部の人だけだからね」。そう付け足す表情には疲弊感が漂います。

一方で、「かさ上げた土地が完成すれば働く場所が復活し、若い世代が帰ってきてくれると信じている」と、希望を話して下さる方とも出会います。

今そこにある風景に対して異なる思いが交錯する三陸沿岸部です。着実に復興への変化を遂げていますが、変化の先の景色は人々にどのような思いを抱かせるのでしょうか。三陸を故郷とする多くの人にとって納得のいく環境が生まれることを望むばかりです。(本願寺派総合研究所研究員・金澤豊)